

まえがき

I

この特集号は、インドの経済発展に関連してリーダーシップのもつ重要な諸問題を総合的に究明しようとする一つの試みである。

ここでは、エリートおよび指導者が経済発展という動態過程において指導性を発揮する場として政治活動、経済計画、村落行政、企業活動、人材養成などの各分野を取り扱う。ここでは、リーダーシップの明確な概念規定を必ずしも前提としていない。リーダーシップへの接近方法は、それが、たとえ、エリートや指導層という人的系譜であれ、あるいは、かれらの指導性の特性に重点がおかれるにせよ、いずれにしても、一つの社会組織から他の新しいそれへと変化をもたらす主体として把握されるかぎり、各執筆者に共通の前提が示されていた。まず、編集企画の段階において、以下の六つの問題項目が組み立てられた。すなわち、(1)政治制度とリーダーシップ、(2)村落リーダーシップと土地改革、(3)ビジネス・リーダーシップと工業発展、(4)経済開発の理念とリーダーシップ、(5)行政組織の伝統と変容、(6)教育体系とエリート、である。このうち、(5)の課題は執筆者の都合により割愛した結果、統一テーマを五つの問題領域に限定することにした。ここでは、社会変化を引き起こすために必要な社会組織（経済組織）の変化主体を、政治制度、村落社会、工業社会、経済開発の制度・組織、および教育制度の中に座標軸としてすえ、独立を前後とするインドの社会組織の変化の過程で、かれらの固有のリーダーシップの本質と役割がどのように変化したか、また、変化しつつあるかを究明しようとしている。ここで注意すべきことは、リーダーシップの本質や役割は、各執筆者がそれぞれの分析視角に基づいて考察しているから、必ずしも相互の関連性が示されているとは限らないという点である。たとえば、政治的リーダーシップと村落のレベルのリーダーシップの結合関係が、経済的・企業家的リーダーシップに対して強烈な、阻止的影響を及ぼしているのではないかという印象を読者に与えるかもしれない。しかしながら、リーダーシップの相互関連性が明らかにされない以上、このような理解は一面的であり、変化の動態を明らかにすることにはならないであろう。ここでは、いずれのリーダーシップの優劣を問うものではないことに注意したい。

II

以下、この特集号の問題構成を簡単に示しておこう。これは、各執筆者相互間の隣接領域を確認することに役立ち、今後の問題の展開にとって有益なばかりか、各自の仮説の検証にとっても有益な参照基準を示すことになる。

(1) 国民会議派を中心とする政治制度とリーダーシップに関連して、インドの歴史的視野と背景の中で指導理念の特性、その影響、展開を分析し、政治的リーダーシップが独立インドの国民国家形成にどのような役割を果たし、かつ果たしつつあるかを評価すること。

(2) 農村社会の村落指導層に関連して、土地改革による村落経済の変容と、村落社会における指導層の構造、ならびに土地改革などを契機とする変容と交代の過程を明らかにすること。

(3) 工業社会におけるビジネス・リーダーシップに関連して、生産的・経済的単位としての各種工業主の企業行動の特質とパフォーマンス、企業グループ相互間の経済的・技術的關係の強化と弛緩の現象を通じて、かれらの工業発展に果たす役割を評価すること。

(4) 経済開発の理念と計画思想の生成に関連して、1930年代の国民会議の経済価値理念の本質と系譜、ならびに、これらが、独立後の計画思想と「社会主義型社会」の理念形成にどのような影響を与えたかを明らかにすること。

(5) エリートの供給体制としてのインド的教育体系、教育の理念と体制、ならびに人材開発のストラテジーを明らかにすること。

以上が、各執筆者に示された質問であり、執筆の際の枠組でもあった。この問題構成に照らして、執筆者は、それぞれの専門分野からリーダーシップと経済発展ないしは社会発展の關係に関する理論的諸問題を提起した。

7編の論文は、いずれも、統一課題に関して「記述的」であるよりも、「問題提起的」な性質のものである。その多くは、従来常識として一般的に容認されていた問題に対し、ひかえめではあるが説得的な実証作業によって、あらたに仮説として問題を投げかけている。

III

海外研究動向の2編は、いずれも、わが国では今まで知られることの少なかった海外の研究状況を伝える資料として有益であろう。「ポーランドのインド経済研究」は、社会主義圏におけるインド経済の研究動向とともに、インドの混合経済という特殊な経済組織のもとでの経済計画の理論的研究の問題状況を伝えている。また、「最近におけるインド農村の社会学的研究」では、村落社会の研究動向と研究方法の反省を強く訴え、社会科学間の協同研究の必要を力説する。いずれも、入念な資料の検証と精緻な理論化、そして、学問相互の協力態勢を背景に進展しつつあるインド研究の動向を伝えるものとして貴重な文献となる。

終わりに、この特集号に協力された内外の執筆者に深く感謝の意を表したい。

(田部 昇)